



もっとこう！通信

2025年
秋号

株式会社 東風社

■万博で未来を考える■

こんにちは、幸本陽平です。

9月上旬、大阪・関西万博を訪れました。会場は猛暑にもかかわらず多くの来場者でにぎわい、終日楽しむことができました。しかし見終えて感じたのは「思ったより未来感がない」…でした。各パビリオンの完成度は高いのですが、展示内容は「AIが献立を提案する」「自動運転が普及する」など、現実の延長線上にある、予想の範囲内のものばかりです。未来の都市のイメージも、どこか見たことがある内容の焼き直しのようで、「いつかこんな世界に！」というワクワク感に欠けていました。

そのように感じた理由は、私たちの生活がここ数十年、実は大きく変わっていないからではないでしょうか。55年前の大阪万博の頃、すでに冷蔵庫や洗濯機、テレビは普及しており、新幹線も走っていました。近年のインターネットやスマートフォンといった情報通信の発達こそ革命的ですが、それ以外の生活様式、たとえば学校に通い、スーパーで買い物をし、車や電車で移動する…などは当時と大差ありません。半世紀を経ても、日常の枠組みはそう変わらず、ほぼ同じままなのです。

だからこそ、万博が描く未来も「実現できそうな範囲」に留まっている印象を受けました。昔は車が空を飛んだり、チューブの中を走ったりとわかりやすい「未来」がありました。そう簡単に社会や生活は変化しないことがわかり、「現実的な未来」が中心になっていました。



現実的な「できること・できそうなこと」がわかつてきたため、万博が「オンラインで医師の診療を受け、ドローンが薬を運ぶ」のようなリアルな未来像を提示するのも確かにわかります。特に物理的な「モノ」のイノベーションは今後そこまで進まないかもしれません。とはいえ、未来は突然予期せぬところからやってくるものです。私たちも20年前、「ああ、かまぼこ板みたいな形の、ネットにつながるタッチパネル式携帯電話があればいいなあ」と考えたわけではありませんでした。未来は基本的に今の延長でちょっとずつ進む、でも突然、誰も予想できないような大きな変化があることがある。そんな風に思っておいて、いろいろなことにちょっとずつでも興味を持っておくことが大切だ、と感じました。

■近況のお知らせ■

6年ぶりの海外旅行で、台湾に行ってきました。前回台湾に行ったのは約13年前です。当時、台湾の物価は日本のおよそ半分くらいでしたが、今は円安もあり、ほぼ日本と同じくらいで、時の流れを感じました。今回は定番の夜市だけではなく初めて故宮博物院を訪れ、台南や基隆にも足を伸ばしました。台南には新幹線で行ったのですが、日本の新幹線とほぼ同じ車両で、不思議な感じでした。夕ウナギやその時期だけの若いタケノコなど、台湾ならではの食事も楽しめて満足の旅でした。

【発行者 プロフィール】

名前 幸本 陽平 (こうもと ようへい)
生年月日 1979年5月30日
出身地 新潟県長岡市
近況 自画像イラストを変えてみました

経歴 :高級化粧品ブランドでマーケティング職を経験後、独立。マーケティングやデジタル思考、プレゼンテーションが得意。書籍5冊。中小企業診断士。

